



2026 年 4 月

理事長・チャプレン 井上 良作

木には望みがある。たとい切られても若枝は絶えることがない。

(ヨブ記 14 章 7 節)

桜の咲き誇る新学期の 4 月となりました。新入学生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新しい学年に進級する生徒の皆さんも、新入生と同様に、新学期に幾らかの不安を覚えつつも、期待に胸を膨らませていることと思います。

この春は、私たち清教学園に関わる人々にとって、大切な時であると思います。1951 年（昭和 26 年）4 月 6 日、清教学園中学校の開校式が行われ、私たちの学校が始まりました。それから 75 年、100 年の 4 分の 3 という節目の時を刻みます。その開校式で初代理事長の橋本通牧師は次のように述べられました。

「はじめに教会の中に夢があった。教会の環境において子供を教育できたらどんなによいだろうと、何人もの先輩がこの夢を懐きつつ、どれも実現しないで天に召されていった。たまたま 1947 年（昭和）の暮れごろ、この夢がまたも教会の胸によみがえった。終戦後の混乱と道德の繚乱はこの夢の実現を一層刺激した。しかし、いざ実行となると容易に手の出せる問題ではなかった。・・・」

清教学園の原型は、教会の中にありました。戦争に敗れて 3 年後、街も人々の心も廃れて未だ復興の道遠い頃、河内長野教会の中に「清教塾」が生まれました。中学生たちが自主的に学力を高め、公立学校ではできない聖書を学ぶことによって人格形成を志す、真剣かつ希望に満ちた塾でした。河内長野にキリスト教を伝えた宣教師 A. D. ヘール先生が、アメリカ建国の父祖たちである清教徒（ピューリタン）の末裔であったことから、その開拓精神にあやかって「清教」の名前をいただいたのでした。

それからほんの数年後、清教塾の塾生たちは、聖書の真理に基づいた本当の学校を願い、熱烈な祈りの中に中学校設立運動を開始しました。そして、教会と地域の人々、国内外の多くの支援者たちの協力を得て、清教学園中学校は誕生しました。「神なき教育は知恵ある悪魔を作り、神ある教育は愛ある知恵に人を導く」、「一人ひとりの賜物を生かす」を建学の精神、教育理念とし



掲げて邁進した学園の歩みは、最初の教師であり後に教頭、校長、理事長として先頭に立って働かれた中山昇先生をはじめ、多くの方々の祈りと献身によって今日まで受け継がれてまいりました。

75年の間、とりわけはじめの約20年は財政的に極めて困難な時期が続いたと聞きます。学園存続のための努力のあらゆる面で、困難の無い時代は無かったことと思います。学園を支えてくださったすべての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。しかし、神様に感謝すべきことに、これらの歴史を通して、学園の中心には共に学び喜び合う生徒たちが絶えることがありませんでした。

生徒のみなさんに覚えていただきたいことは、これらすべては「夢」から始まったということであり、今この学園で学んでいるみなさん自身が創立者たちにとり、「夢」そのものに他ならないということです。学園創立者のお一人である故中山昇先生は、「皆で一心に願った祈りを神様は必ず聞いてくださるといふことの証言者としての使命を、神様からいただいている」と述べておられました。みなさんは、夢と祈りが現実となった証なのですから、みなさん自身も夢を懐いて、この学び舎で大いに学び、かけがえのない青春を楽しまれることを心から願っています。

冒頭のヨブ記の一節は、石に刻まれて碑として静かにキャンパス内で佇んでいます。高校12期生が卒業記念に贈った樅の木に、中山先生が添えられた「贈る言葉」でした。その中にある、「若枝」(=ひこばえ)は旧約聖書に多く見られる、イエス・キリストのことを指すメシヤ預言の言葉です。「若枝」はヘブライ語で「ネーツェル」と云い、「ナザレのイエス」と呼ばれた「ナザレ」と同じスペルになります。大きな木が根元から切り倒されて望みが失くなったように見えるところでも、その脇から若枝が生え、しかも、神様はそこからまた大きな木に育ててくださるといふ意味です。ユダヤ人の苦難の歴史とイエス・キリストの誕生を示しています。

人の一生では、なんの躓きもなく順調に育つに越したことはありませんが、必ずしもそうはならず、困難に挫折することはつきものです。たとえそんな試練があっても負けずに克服して強く生きられるように、神様は共にいて助けてくださる。清教学園のみなさんは、そのような方に、愛され生かされているのだということ覚えていただきたいです。